「日本写真保存センター」調査活動報告（17）

時代の諸相を撮る―収集・保存した写真原板から―

松本 徳彦（専務理事）

1945年2月19日に米軍が硫黄島に上陸。守備隊全滅。3月9日から10日にかけてB 29が東京を空襲し、江東地区を中心に大空襲。23万戸が焼失、死傷者12万人以上。全国の主要都市の空襲が続く。4月1日沖縄本島に上陸、日本軍全滅。8月6日広島に原子爆弾が投下され、死傷者14万人以上。続いて9日には長崎に原爆投下、死傷者7万人以上を出す。8月14日御前会議でポツダム宣言の受諾を決め、15日正午、昭和天皇は戦争終結の詔書を放送（玉音放送）。第二次世界大戦終わる。30日連合国最高司令官マッカーサーが厚木飛行場に到着。9月2日東京湾上の米艦ミズリー号で無条件降伏の文書に署名。と、めまぐるしい勢いで歴史が大きく変わっていった。

大束 元の敗戦の日

8月15日正午から天皇の重大な放送があることを知らされていた国民は、それぞれの場所でどんな放送があるのかを聞くために、職場では手を休め、街角ではラジオのある場所に集まって、正午が来るのを待っていた。放送が始まると首を垂れ、無言で佇んだまま聞き入っていた。大阪の朝日新聞社写真部員だった大束元（1912~92）は、軍需工場で働く女子挺身隊員たちをガラス乾板カメラで数枚撮った。憔悴した表情には悲しみの涙は無かった。ところが現存するプリントや乾板には涙が書き加えられている。当時の新聞ではよくあった方法で、プリントに筆やエンピツで描き起こしたり、消したりして臨場感を演出する手法がされていた。

大束は1912年東京北区滝野川で写真修整の名手であった父昌司の長男として生まれ、29年東京高等工芸学校写真科へ進学。33年卒業、在学中に野島康三、中山岩太らによる『光画』に「やもり」を発表。のち英国の写真年鑑『Modern Photography』に掲載される。34年には銀座紀伊国屋画廊で個展を開くなど、写真の技量は優れていたようだ。同年朝日新聞社大阪本社に社会部員として採用され、37から43年にかけて華北、タイ、シンガポールへ派遣され従軍報道に関わる。45年軍令により大阪の大正飛行場偵察隊に配属され、B 29の標識撮影をする。敗戦後48年に東京本社の出版写真部へ移り、50年から『アサヒカメラ』でポートレートや斬新な視角による「新東京風景」で「ニコライ堂」「雪の幻想」などを。「現代の感情」で「靖国神社大祭」「出勤」を。舞台写真ではマーサ・グラハムの「黒い躍動」、マルセル・マルソーの「パリが来た」などを発表する。「ニコライ堂」は2枚の写真をつなぎ合わせ、「雪の幻想」では新聞社の窓から撮った銀座風景に、降りしきる雪を写したネガの2枚を重ね合わせて、幻想的な都市風景を表現し話題を呼ぶ。超望遠で撮った「富士山頂」や日中の長時間露出による白っ茶けたビル街「死の街」など、様々な技法を駆使して制作した。晩年は全日本写真連盟でアマチュアの指導にあたるなどした。

割れたガラス乾板　1945年8月15日

山村の暮らしを撮る ― 朝倉 隆

わが国は平地が少なく山が多い。急斜面に段々と耕地をつくり、山仕事や炭焼きで生活している。山村はいまも交通手段が乏しく、古い制度や因習が根強く残っている。土門拳の助手をしながら、ドキュメンタリーの仕事を手がけてきたのが朝倉隆（1923～2007）である。なかでも岩波写真文庫で農山村を捉えた『村と森林』（岩波書店　58年3月刊）は出色である。山梨県塩山市三富村を1年余にわたって撮り、日本の代表的な農山村の風習や生活振りを撮った。

村には週2回、3里の山道を登って魚の行商人がや

山梨県三富村広瀬　1957年頃

ってくる。村の年老いた婦人たちが集まって、品定めが終わるとよもやま話で賑わう。そばでは就学前の子供たちが集まって遊ぶなど、貧しくものどかな光景が見られた。山村での仕事は炭俵作りにホップの栽培とわずかしかない。若者や男衆は街に下りて働き、祝い事のある日に帰ってくる。どの家も子沢山で、村の分教場へ行く年頃になると家事手伝いなどで学校を休む児が多くなる。それでも自然を舞台に遊びを工夫して楽しんでいる。そんな村にも冠婚葬祭時には、溢れんばかりの親族や友人たちが集まり、喜びにつけ、悲しみにつけ、夜を徹して飲めや歌えの饗宴が続く。しかし、村で働く青年のもとへは、嫁にくるものがいないという悩みがあった。こうした現象はいまも続いている。

川上重治の一生の証人たち

1960年5月19日、日米安全保障条約の改定審議で、自民党が強行採決をし、国会審議がストップする。26日、安保を阻止するデモ隊が国会を包囲。6月15日全学連主流派と警官隊が衝突し、東大生の樺美智子さんが死亡。全国で580万人が参加。新安保条約自然承認。10月12日、日比谷公会堂で演説中の浅沼稲次郎社会党委員長が右翼の少年山口二矢に刺殺される。以降、62年のサリドマイドによる奇形児が問題化。キューバ危機。64年東京オリンピック開催。ビートルズ来日。68年東大紛争、安田講堂封鎖。3億円強奪事件、70年大阪で万国博覧会開催。光化学スモッグ、ヘドロ公害。71年浅間山荘事件、高松塚古墳発見。沖縄市政権の返還、72年田中角栄首相が列島改造論をぶち上げる。73年石油危機でトイレットペーパーの買いだめ騒動。75年天皇、皇后訪米。ロッキード事件。天安門事件。77年日中平和友好条約調印などと、めまぐるしく歴史は動いていた。

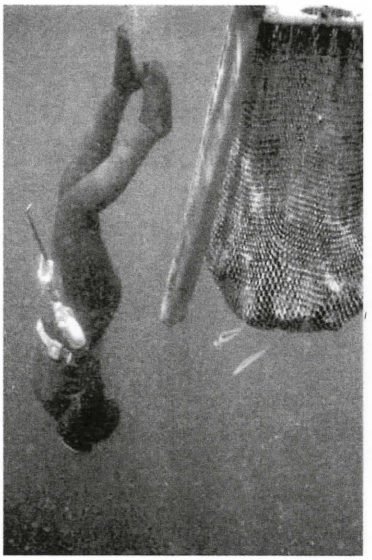
オリンピックや万国博を機に、日本全国で国土開発が始まり、経済も上向き、国民のライフスタイルが大きく変化した。家電製品にテレビ、洗濯機、冷蔵庫、炊飯器が加わり、マイカー、カラーテレビへと生活が豊かになっていく。その一方で、公害問題や青少年の非行が増え、精薄者, 自閉症児対策など陽の当たらないところでの格差が進んでいったのもこの時代であった。

自己実現の教育 —麦・もみじ・あざみ寮　1966～69年

高校教師をしていた川上重治は、口先だけの政治に嫌気がさし、光の当たらない教育現場に飛び込み、現実を写真でもって捉え訴えることにした。ロマンティックに取り上げるマスコミに抗して、ひたむきに活動する現場の人たちと子らを同列の目線で捉えた。そこには心情的な同情ではなく、正しい理解と認識を訴える川上の強いメッセージが伝わってくる。

ユーモアあふれるスナップフォト—中村由信

1925年香川県直島町に生まれた中村由信は旧制の香川県立高松中学校を卒業し、46年三菱金属直島精錬所に勤務。49年岡山の緑川洋一に師事し、55年上京、東京光芸社に入社するが退社し、フリーの写真家になる。主に月刊誌のグラビア頁に作品を発表する報道写真家となる。ユーモアあふれるスナップフォトから民俗学的な視点でのドキュメントなど幅広い。SLに興味を持ち、数多くの写真集を出版する。ユーモアたっぷりな人柄に、人間味のある心優しい写真は万人から好まれ、アマチュアに人気があった。仕事の幅も広く瀬戸内をテーマにした『こんぴらさん』(56年)、『瀬戸内海の旅』、『日本の海女』、『瀬戸うちの人びと』と続き、『日本の汽車』、『蒸気機関車』などのSLと、指導書に『私の組み写真作法』、『スナップフォトの実技』などがある。集大成といえるのが『日本方言図鑑』(86年)で、取材で訪ねた全国の方言と写真で構成した写真集もある。掲載の海女は対馬の厳原町で撮ったもので、海辺に住む男衆は船を操り、女が家事と漁猟を担う。素潜りでアワビやサザエなどの海産物を採って生活していた。撮影にはオリンパスを使った自作の防水カメラを使って、素潜りで海女を追って撮影。海女を撮り続けたのは、彼女たちの若々しく天真爛漫な対応にあったと言う。ユーモアたっぷりのスナップで名高い作品に「島の駐在さん」がある。四国多度津の沖合にある佐柳島に駐在する巡査と親しくなり、駐在さんをモデルにあれこれ設定して、何日間も撮り続けた結果、ユーモアあふれる作品が生まれたという。スナップの極意は被写体に話しかけ、自然な表情を狙い、すかさず撮ることだ。



海女・対島厳原町　1970年